opusdei.org

属人区長の手紙 (2020年10月28 日) | 召命について

この新しい司牧書簡の中で、フェルナンド・オカリス 師はオプス・デイの精神と、さまがまな個人的な状況に応いてあるが、ボーのオプス・ディの、献身の特徴について考察しいます。

2020/11/13

PDFダウンロード (日本語)

PDFダウンロード(スペイン語)

目次

I.召命というたまもの.. 2

至高の恵み…2

同じ精神... 3

同じ使徒職の使命... 4

同じ手段... 5

一致と多様性... 6

全生活とともに...7

||.ヌメラリとしてのオプス・デイへ の召命... 8

内的心がまえ...8

十字架に釘付けにされた一団... 9

III.アシスタント・ヌメラリとしての オプス・デイへの召命... 11 優先すべきは人と家族... 11

あらゆる環境から.. 12

使徒職の中の使徒職…12

IV.アソシエートとしてのオプス・ディへの召命... 14

固有な性格によって.. 14

キリストのよき香り.15

V.属人区の司祭について.. 16

他者への奉仕のために.. 16

VI.ヌメラリとアソシエートの使徒的 独身について.. 18

VII.スーパーヌメラリとしてのオプ ス・デイへの召命... 19

神の大いなる恵み... 19

結婚と家庭... 20

置かれた場所で周囲にキリスト教的な影響を与える.. 20

VIII.聖十字架司祭会のアソシエート、スーパーヌメラリとしてのオプス・デイへの召命… 22

愛する皆さんへ。イエスが私の子ど もたちを守ってくださいますよう に!

I.召命というたまもの

至高の恵み

2神はすべての人を選び、お呼びに なります。「神は私たちが神のみ前 で聖なるもの、非のうちどころのな いものとなるように、…私たちへの 愛によって、選び出してくださいま した | (エフェソ 1,4)。若々しい 心で、このたまものを意識し責任を 感じるなら、私たちは世界の聖化に 協力するよう促されることでしょ う。教会の中のすべての信者と交わ りを持ちながら、私たち一人ひとり にとって、オプス・デイにおいて具 体化される、このキリスト教的召命 に寛大に応えるよう努力しましょ う。

この召し出しの偉大さを見ましょう。この召し出しは、私たちの限界 と過ち、そして道で出会う困難にも かかわらず、この世での歩みを永遠 の価値で満たしてくれます。私たちのパドレは、「どんなひどいことがあっても」と言っていました。

聖ホセマリアは、「召命という至高 の恵み」という表現で語っていまし た。その恵みは一時的なものではな く、恒常的な恵みです。「召命とは 人生についての新しい見方です。 (…) ちょうど私たちの中で光が 灯ったかのようです」。同時に「神 秘的な衝動 | 、「抵抗しがたい何か をもった生命の力」[1]でもありま す。簡単に言うと、私たちの全人生 を包み、光と力として現れる恩恵で す。光りであるとは、私たちに道を 見えるように、神のお望みを見える ようにしてくれるからです。力であ るとは、その呼びかけに応えるた め、つまり「はい」と応えてその道 を進み続ける力を与えてくれるから です。

同じ精神

3オプス・デイでは、すべての者が、各自それぞれの個人的状況の中で、同じ召命を持っています。すなわち、皆が同じ精神、同じ使徒職の使命、同じ手段をもって、オプス・デイになり、オプス・デイをするように呼ばれているのです。

皆が同じ精神を持っています。それ は日常生活、なかでも仕事を聖化す るように促します。「この地上にあ る人間の高貴な仕事で、神化できな いもの、聖化できないものは何一つ ありません。私たちが聖化するべき ではない仕事などありません。すべ ての什事を人と社会を聖化する什事 にしなければなりません」[3]。この 精神によって、生活の各瞬間に私た ちが相対するものの中に、神との一 致を探すように促されます。それゆ え、仕事の聖化は、私たちが恩恵に 応えながら、聖性、すなわちイエ ス・キリストとの同化を追求するた めの《基軸》なのです。

このことは、地上の現実をポジティブに見るように導いてくれます。地上の現実は、神が私たちにお与えになったものです。この世を愛しましょう。もちろん、その中に善に反するものがある(1ヨハネ2,15参照)ことを無視するわけではありませ

また、仕事の聖化が私たちの聖性の 《基軸》であるならば、神の子である精神は基礎となるものです。神の 子であることは、成聖の恩寵におやて私たちを聖霊によって御子に似まっての で入なる神の中に《導き入れて》 は神の子とされました。神のこの は神の子とされました。神のこの は神の子とされました。神の自 は神の決定によって、人間本性の尊厳 は比較にならないほど高められたのです。もし罪がこの驚異的な御業を破壊したなら、贖いの業は、それをさらに感嘆すべき仕方で再建し、私たちがみことばの神的子性に、さらに一層緊密に参与できるようにしてくださったのです」[4]。

神の子の精神は基礎であるがゆえ に、私たちの生活すべてを形づくり ます。神の子としての信頼をもって 祈り、神の子の自由闊達さをもって 生き、神の子の自由をもって考え決 定し、神の子の落ち着きをもって痛 みや苦しみに対処し、神の子がする ように美しいものを愛めでるので す。ようするに、神の子の精神は、 「あらゆる思いと望みと愛情の底に ある | [5]のです。そして、必然的に 兄弟愛に広がります。「聖霊ご自身 が私たちの霊と共に、私たちが神の 子であることを証明してくださるの です| (ローマ 8,16)。この証明と は、私たちの中にある神に対する子

としての愛で、それは兄弟愛を伴います[6]。「他の人々は別の泉から飲みます。私たちにとって、人間の尊厳と兄弟愛の泉は、イエス・キリストの福音にあります」[7]。

私たちの霊的生活の中心であり根源であるのは、なんと言っても聖体の犠牲です。それは客観的に見て根っこです。なぜなら、「『キリストが我々の過越の小羊として屠られた』(1コリント5,7)十字架の犠牲が祭壇で行われるたびごとに、我々のあがないのわざが行われる」[8]からです。

他方、主観的に見ると、私たちの生活が本当にミサを中心にして営まれているかどうかは、各自がどのように思恵に応えているかにもかかっています。「祭壇上の聖なる犠牲があなたの内的生活の中心になり源となるより、一日全体が礼拝の行為となるよう闘いなさい。すなわち丸一日が

与ったミサ聖祭の延長および次のミサの準備となり、それが射祷や聖体訪問、専門職と家族生活の奉献などとなって溢れ出るように」[9]。

それだけでなく、使徒職の発展と効果もキリスト教生活の中心であるミサから生まれます。「御聖体を中心にして生きる人になりなさい。子よ、あなたの思いと希望の中心が聖櫃にあれば、聖性と使徒職は何と豊かな実を結ぶことだろう」[10]。

同じ使徒職の使命

4 私たちは《同じ使徒職の使命》を 持っています。つまり、私たちは自 己を聖化すると同時に、この世界を キリスト教的に変革するという教会 の使命に協力するよう呼ばれている のです。それは、私たちの場合はオ プス・デイの精神を生きることなの です。オプス・デイの固有の使命 は、教会の偉大な使命の中でのみ正 しく理解されるのです。「救いをもたらす主の愛についてはっきりとあかしするよう、私たち皆は呼ばれているのです。主は、私たちの不完全さを超えて近づいてくださり、みことばとご自分の力と、生きる意味を与えてくださいます」[11]。

キリストの神秘体である教会の中に いることによってのみ、私たちは現 代世界に効果的に仕えるための力を 受けるのです。ですから、私たちは あらゆる限界をもっているとして も、あらゆる時代のあらゆる場所の 教会の夢と心配と苦悩を共有するの です。私たち一人ひとりは、聖パウ 口のあの態度を自分のものにするこ とができます。「だれかが弱ってい るなら、私も弱らないでいられるで しょうか。だれかが罪に落とされよ うとしているなら、私も身を焼かれ る思いをしないでいられるでしょう かし (2コリント11,29)。

5使徒職の使命はいくらかの活動だ けに限られません。なぜならイエ ス・キリストへの愛をもてば、すべ てのことを隣人へのキリスト教的奉 仕に変えることができるからです。 各自は自分の生活をもってオプス・ デイの使命を完全に実行します。家 族の中で、職場で、友人知人と膝を 突き合わせて暮らす社会の中で。そ れゆえ、なぜ聖ホセマリアが次の教 えを繰り返したかが分かります。オ プス・デイにおいてはいつも、「組 織的で構造的なものではなく、個人 が聖霊の働きの下に自発的に行う使 徒職が、つまりその自由で責任をと もなう活動が最も大切なもの」とさ れます[12]。それがために、オプ ス・デイの主要な使徒職は、一人ひ とりが個人的に行う、友情と親しい 語り合いの使徒職なのです。

これらすべてを見ると、「すべての 使徒職の務めとそれを遂行するため の道具は、皆の重荷であり名誉

(onus et honor) なのです。ヌメラ リ、アソシエート、スーパーヌメラ リのものであり、また協力者の人々 のものでもあります」[13]という言 葉の意味がよりよく理解できます。 使徒職の使命は、聖徒の交わりに よって、あらゆるところで皆が一緒 に行うのです。だから、教会の中の すべての信者を念頭に置いて、聖ホ セマリアは、「手段さえ講じるな ら、この世の塩、光、パン種となる こともできる。つまり神をお慰めす ることさえできる」[14]と言われた のです。

同じ手段

6私たちの使命を遂行するための道はキリストです。弟子たちや使徒たちのように、主に付き従うために、オプス・デイにおいて皆は《同じ手段》を持っています。つまり、同じキリスト教的生活の規定と習慣、同じ霊的・教理的形成の手段です。そ

れらへの参加の仕方は各人の状況に 応じて異なりますが、その全体は本 質的に同じものです。

それらは手段であって目的ではない ことを忘れないようにしましょう。 それらは、神の恩恵によって、諸秘 跡、中でもご聖体によって与えられ る溢れんばかりのキリストにおける 生命に養われた諸活動の中で、観想 生活に進んで行くよう導いてくれる 手段です。

信心の業の実践は、私たちの全生活を包み込み、イエス・キリストの大力に導く愛の対話のな出会いに導く愛がご自分を表したする。それらは、神がご自分と行うのです。を私たちの命と分かち信がしたがある時間です。信がないでするが、「聖性は、のですないです。(そのように柔軟なものです。)ではなく、ほほえみ、譲歩し、行きではなく、ほほえみ、譲歩し、行きでは、ほこのようにない。

とを知っている。聖性とは生命、つまり超自然の生命なのです」[15]。

一致と多様性

7私たちのパドレは、オプス・デイを同じ召命を生きる様々な仕方によって織りなされた「唯一の織物」と考えていました。それゆえ、オプス・デイの召命の生き方には種々の

方法があり、各自が携わる職業が千 差万別であっても、それによって階 級が生じたり、一流のメンバーと二 流のメンバーの区別が生まれたりは しないと強調していました。超自然 的なあらゆる現実に見られるよう に、本質的なものは 一この地上では 判別できませんが一 神の愛への応え なのです。

聖ホセマリアは召命のこの一致を次のように説明していました。私たちの召命は、「唯一の神の召命であり、唯一の霊的現象であるが、それは各自の個人的状況と身分に柔軟に適応される。様々な状況を生み出す自然な限界において、召命の同一性は等しく献身を生きることに現れる」[16]。

当然のことですが、オプス・デイに おける一致と多様性は男性と女性に 関する事柄も含みます。つまり、そ れは精神における一致、使徒職の使

命と手段の一致ですが、同時に、そ れぞれの独自な活動に関しては分離 があります。それに加えて、オプ ス・デイ全体に共通する事柄におい ては、中央と地域のレベルで方針の 一致があります。男性と女性のそれ ぞれの統治機構は、同一のイニシア ティブと責任を持っています。した がって、法律によって定められた具 体的で重要な事柄についても、属人 区長、あるいは地域においては地域 代理が提案することに対し、男女 各々の統治機構は、受諾することも 拒否することもできる権利を同等に 有していますん

全生活とともに

8 オプス・デイの使命を果たすにあたり、人によって献身の度合いが違うように見えるかも知れません。しかしそうではありません。誰もが《等しい献身》を生きるのです。なぜなら、オプス・デイになり、オプ

ス・デイをすることは、使徒職の決まった仕事や共同の使徒職に協力することだけにあるのではないからでまたその協力が献身の主要ないが献身の主要ない。 またその協力が献身の主要れたをものでもありません。 召を上げればをしたいうものではありません。 全生活がイエス・キリストとの出会いを活がイエス・キリストとの出会いでは、

る面に組み込まれる | [17]。《全面 的な召命への取り組み》、自己の人 生のすべてを巻き込み、完全な献身 を生きること。なぜなら、神はあら ゆることにおいて神を愛し隣人に什 えるように私たちをお呼びになって いるからです。それは内的自由にほ かならない愛をもってなされます。 そのためドン・アルバロがコメント しているように、「オプス・デイは 幅広い柔軟な態度を要求します。最 低限度の規則は必要ですが、あくま で最低限度です。それは文字が精神 を殺さないためです。『文字は人を 殺し、霊は人を生かす(Littera enim occidit, spiritus autem vivificat)』(2コリント3,6)とある ように」[18]。

9 この手紙では、皆さんもまた、召命のたまものに対して、主への感謝を更新するように招きたく思っています。それは喜ばしい感謝ですが、神が望まれるとおりのオプス・デイ

全体の美しさを眺めるときだけでなく、属人区の各信者が同じ召命を生きる個人的な仕方、すなわちヌメタリとして、アウリとしても一、アウリとして、スーパヌメラリとして、スーパヌが会のもして、スープといは聖十字架司祭会の美して生きる仕方の中にその美したものです。

これに関連して、数ヶ月前に皆さんに書き送ったことを繰り返したとを繰り返したとれる信仰と素すの信仰ですれたらしたというに示すれた。自己はないとの個人ではないとのはないとのはないとができるというできるとができるというできるという[19]。

Ⅱ.ヌメラリとしてのオプス・デ イへの召命

10「オプス・デイのふところの中 で、奉什の特別な使命に呼ばれたヌ メラリは、すべての兄弟の足元に身 を置き、兄弟姉妹の聖性の道を快適 にし、彼らの心身のあらゆる必要に 対処し、困難に際して彼らを助け、 自己の献身的な犠牲によってすべて の人の実りある使徒職を実現可能な ものとします | [20]。このようにし て、ヌメラリは兄弟に命を差し出し ます。その仕事は、「皆の精神を活 性化させ目覚めているようにさせる ことで、兄弟愛と一致という非凡な 現実をもたらすのです」[21]。

ヌメラリのオプス・デイへの召命 は、使徒的独身のたまものと、形成 と使徒的な働きに全面的に従事する ために定められています。他者への 奉仕という特別の使命として理解さ れ実現される全面的な従事は、ヌメ ラリたちが通常、オプス・デイのセンター住むことによって容易にないことによって容易にないことがら、そうでるとい事情も多々生じるとでしょうが、それはメララを住しとでのアイデンティティと使命を全にでのアイではあいません。どこでのようとも、常に他のするにを合いるのです。

内的心がまえ

11 ヌメラリが他の人々に仕える心構えとは、真の《内的心構え》に基づきます。それは、神のためだけに、また、神ゆえに人々のために生きるという《実際的な》自由であり、オプス・デイが必要とする任務を引き受ける意志と合致したものです。

ある人たちにとっては、福音の喜び をもたらすために、自分の才能、適 性に応じた職業に専念しながら、形 成と使徒的な仕事に協力するという 形をとることもあるでしょう。ま た、ある人たちは、専門職としてオ プス・デイのセンターの管理に携 わったり、あるいは、使徒的な諸活 動において、形成、統治、指導、協 力の仕事に携わることでしょう。

一方、心構えとは、《頼まれたこと》をするという受動的な態度に限定されるものではなく、使徒的ようにものから、とないの方は神から進んでするとながではなるものととは、ではなって、くっとはないではなって、ではなって、のではなって、ないではなって、のではないではないです。

全面的な心がまえとは、自由なもの として理解し生きることが大切で す。つまり、愛以外の束縛を持たな いことなのです(ある仕事やあるセ ンターなどに執着していないこと。 とは言いつつ、自己のいる場所に しっかり根付くことを放棄する訳で はありませんが)。私たちを自由に してくれるのは、外的な状況ではな く、私たちが心に抱いている愛なの です。

奉仕というこの固有な務めの具体化 として、私たちのパドレは、オプ ス・デイにおける統治の任務をヌメ ラリに任せることを考えておられま した。統治の仕事に献身する人は不 可欠です。全体の生命を維持するた めなのですから。しかし、統治や形 成の仕事に携わっている人はより完 全な心構えを持っていると考えた り、彼らが《もっと》オプス・デイ をしていると考えるなら、間違いを 犯すことになるでしょう。この点に 関して、ドン・ハビエルはある手紙 の中で次のように書いています。

「使徒職を導いたり、兄弟たちを霊 的に助けたりするために、娘や息子 たちの誰かが、自分の専門的な活動を縮小するか、あるいは、少なくともしばらくの間は完全に脇に置いておく以外に選択肢はないのです」 [22]。

私たちのパドレは、この全面的な内 的心構えについて多くの箇所で語っ ています。例えば、「ヌメラリは 皆、神的召命によって、自分の持っ ているすべて、心のすべて、自己の 携わる活動、財産、名誉を無制限 に、直接、即座に焼き尽くすいけに えとして主に捧げなければなりませ ん」[23]と書いています。これはま さに、オプス・デイをするために、 すべての活動、それらがどんな活動 であろうと、制限なく、自由に捧げ ることなのです。明らかなことです が、時には、ある時期に何かの依頼 や務めを引き受ける可能性が、客観 的にみて制限される状況も起こり得 るでしょう。ですから、イエス・キ リストへの愛ゆえに他の人々に仕え

るたの全面的な心構えにおいて重要 な事は、内的にそうであることを繰 り返しておきます。

十字架に釘付けにされた一団

12聖ホセマリアの他の言葉も思い起 こしてみましょう。「我らの主は、 はかない性格の人をオプス・デイに お望みではない。不朽の性格を求め ておられる。なぜなら、オプス・デ イの中に、十字架に釘付けられた一 団をお望みになるからだ。聖なる十 字架は、常に福音の同じ精神で私た ちを不滅の者にし、祈りと犠牲の素 晴らしい実りとして活動の使徒職を もたらすだろう | [24]。私たちのパ ドレは、十字架に釘付けられたこの 一団が誰のことなのかを明示してお られませんが、ドン・アルバロは、 この段落についての注釈の中で、オ プス・デイにおいて自分の召命を生 きていくための様々なあり方が、す でにここで表明され、言及されてい

ると指摘しています。文脈から、この場合、何よりもヌメラリのことを指していると考えることができます。

他の文書で、聖ホセマリアは、特別に十字架に釘付けられた者たち。国際たちに言及していパータにもする。アクシエートを指がいたっている。アクシエーを指がいかが、私たち皆がはいいないが、ないないないが、ない体験で見出すがいる。大字架を抱くいることです。「25]

ヌメラリにとって、しばらくの間それまで携わっていた職業を離れ、他の種類の活動(センターの管理、使徒職活動の統治、形成、指導、協力)を専門職とすることは、人間的

に辛いことかもしれませんが、それは十字架との実りある出会いであり、キリストとの最も深い一致の場であり、しばしば思いもよらない超自然的な大きな喜びの源です。

13私たちがオプス・デイへの加入を 求めるとき、この心構えの態度が求 められることを知っており、自由に 一愛ゆえに!一、それを受け入れま す。こうして、神のプロジェクトに 参加するように導かれて行きます。 同時に、内的生活における他の事柄 と同じように、この献身の効果的な 成熟は、時間をかけて成長して行く のです。この成長は、形成を受ける ことや内的生活を介して、また、寛 大に応える様々な経験(計画の小さ な変更や任される事柄の変更など) によって深まって行きます。こうし て、必要なら大きな変更に対しても 心を準備して行くのです。当然のこ とながら、ディレクターたちは、重 たい任務や大きな変更を依頼する際

には、事前に当事者の意見を聞くようにしています。そして、彼らは難しく思うことを誠実に打ち明けるでしょうが、神と人々への愛ゆえに、必要なことであれば何でも引き受ける心構えを持っていることでしょう。

あえて繰り返しますが、大切なことは、一人ひとりが、兄弟たちやキリスト者である私たちの奉仕を待っている多くの人々に献身するという、恒常的で内面的な心構えを持っていることです。「目を上げて畑を見なさい。畑は刈り入れを待って黄ばんでいる」(ヨハネ4,35)。

この心構えは、健全な職業的野心や、経済的に自立すると共に超自然的な家族の必要を配慮するという理に適った責任感と完全に両立します。まさに、他者の形成に専念するためにオプス・デイが要求するならば職業を変えるという心構えば、世

の中の諸問題に同僚たちのように挑むことを望む者であるという自覚と歩調を共にできるのです。なぜなら、その使命は世界を変革し神のもとへ導くことを助けることにあるからです。そして、それは、オプス・デイにおける指導と形成を担う立場においても、非常に効果的な方法で実現できるのです。

あなた方ヌメラリは、霊的父性と母 性へと開いてくれる、キリストの愛 の充満である使徒的独身のたまもの を生きています。あなた方は、全面 的な心構えですべての人々に奉仕す ることによって、世界のまっただ中 で、神への完全な献身の生きた証し となるよう呼ばれています。つま り、イエスへの愛、人々への愛、世 界への愛を生きる者なのです。あな た方は、超自然的な家族を守るよ う、そして、あなた方の兄弟たちの 世話をするために、特別の招きを受 けているのです。

あなた方の前には広大な地平線が開けています。あなた方の捧げられた生涯は、人の目には触れず人間的な輝きもないかもしれませんが、豊かな実りを世界の隅々にいたるまで届けることでしょう。

III.アシスタント・ヌメラリと してのオプス・デイへの召命

14 アシスタント・ヌメラリである皆 さんには、奉仕の特別な役割があり ます。オプス・デイのセンターでキ リスト教的な家庭の雰囲気を醸し出 し維持するために、皆さんはこの奉 仕を発展させていきます。皆さん は、職業としてこの務めを実現して いきますが、皆さんの場合は、セン ターの管理部の仕事なのです。周知 のように、皆さんの仕事は、私たち の誰もが何らかの形で携わるべき物 的な雑務をこなすというものではあ りません。それらの事柄について予 定を立て、組織立て、調整する皆さ

んの仕事によって、そのセンターの 誰もが温かく受け入れられ、《認め られ》、世話を受けていると感じ、 自分の家庭として責任感を抱くよう にさせるのです。このような事柄は すべての人にとって極めて大切なこ とですから、皆さんの仕事は、オプ ス・デイ全体とメンバー一人ひとり の在り方や霊的な調子に影響を及ぼ すのです。女性であるあなた方の霊 的な「大きなエネルギー享受する 人々にとって、皆さんは何ものにも 代えがたい支えであり、霊的な力の 源 | [26]になるのです。

優先すべきは人と家族

15 あなた方の仕事において、一人ひとりを中心に置き人のことを優先的に考えることにより、その仕事によってオプス・デイの生活を守り、奉仕しているのです。そうすることで、オプス・デイは家族であることが非常にはっきりと示されます。そ

れは比喩などではなく、真の家族なのです。私たちのパドレが、オプス・デイにおける絆は血縁よりも強いと幾度も話しておられたことを思い出してください。それは、お互いの愛情にも表れてくるものなのです。

聖ホセマリアは、管理部の仕事は聖母が携わっておられたのと同じ仕事であると、しばしば考えておられました。それゆえ、オプス・デイの《家族の雰囲気》は、一目にしたことはなくても想像できる一ナザレの家庭の雰囲気の写しであり、延長であるべきなのです。

たとえ、文化の違いで管理部固有の 仕事を別の言い方で表しているとし ても、アシスタント・ヌメラリであ る皆さんは、実際に姉妹であり母親 であり、パドレと他の子どもたちと 同じく、家族にとって大切な存在な のです。オプス・デイにおいて皆の 世話をするために、皆さんが神から 受けた恩恵を知っていた聖ホセマリ アは、もし可能であったなら、アシ スタント・ヌメラリになっていたこ とだろうと語っていました。皆さん を自分の《小さな娘たち》と呼んで いましたが、それは、オプス・デイ に現れたのが後の方であったからで すが、皆さんを年少者のように考え ていたからではありません。それと は反対に、オプス・デイの偉大な 様々な意向を実現させるために、皆 さんの成熟し堅固な忠実に特別の信 頼を寄せておられました。

あらゆる環境から

16 アシスタント・ヌメラリとなる 人々が、あらゆる環境から出ている のは素晴らしいことです。実際に、 神が望まれているのは、ヌメラリと してなのか、あるいはアシスタン ト・ヌメラリとしてなのか、どちら かで迷う人が時々います。様々な要 素の中でしっかり見極めるべきことは、本人が、直接人々に奉仕し、世話をする仕事に関心を持っているかどうかです。霊的指導とディレクターたちの導きを受けつつも、最終的な見極めは、当然ながら各人にかかっています。

いずれにしても、管理部の仕事は、 家族に家庭の温かさを与え、それを 維持するという素晴らしい尊厳のあるものです。さらに、管理部で働る ものです。さらに、管理部で働るものです。 大たちは、「この専門職一真の高にな仕事ですから一を通して、時に を見して、時に家庭だけではなく、関知れない友人や知人、様々な形を与えるのです」[27]。

使徒職の中の使徒職

17聖ホセマリアは、管理部の仕事を高く評価し、《使徒職の中の使徒

職》と考えていたほどです。この仕事無くしては、オプス・デイの前進 はあり得ませんでした。

第一に、使徒職の中の使徒職というのは、その仕事自体が直接の使徒職を使徒のは、その仕事自体が直接のはあるです。強調したでははいるで重要なを全しているを生だけられた。です。といるでは、ではいるでは、ではいるでは、管理しているではではないでです。あるたながでである。あるというでは、見事なが形成を与えます。

良く果されたあなた方の仕事は、実際に、ある精神を具体化し、事実をもって、具体的で継続的な仕方で効果的に伝えていくのです。ですから、私の子どもたち一人ひとりがそれぞれの仕事に取り組んでいるように、あなた方は、家庭の仕事をでき

る限りの専門知識を持って実行するよう努めているのです。その仕事を 聖性の展望へと高めるなら、人々へ の奉仕はただちにプロとしての権威 ある仕事となり、人間らしい仕事と なり、多くの人に専門職の刺激を与 えることになるでしょう。

次に、管理部の仕事が使徒職の中の 使徒職であるとは、特に仕事を神と の対話にしようとする皆さんの努力 によって、その働きは生気を与える 刺激となり、他の諸活動を可能にす るからです。聖ホセマリアが皆さん に向けて記しています。「あなた方 が管理部で働くとき、全ての使徒職 に参加し、全ての活動に協力してい るのです。管理部が良く機能してい ることは、不可欠な条件であり、あ なた方が神への愛をもって働くな ら、全オプス・デイにとって最大の 励ましとなるのです」[28]。ある国 や町で使徒職が始まったばかりの時 には、まだ管理部がないことを痛感

するものです。また、管理部が活動 を始めると、オプス・デイは益々活 力に溢れ躍動するのを感じます。さ らに、当然のことですが、アシスタ ント・ヌメラリであるあなた方は、 各々の可能性に応じて、他の多くの 使徒職活動に協力します。

アシスタント・ヌメラリの娘たちには、ワクワクするような使命があります。それは、個人主義と無関心が溢れかえっている現代の世界を本物

の家庭に変革することです。愛を もって実践している皆さんの仕事 は、あらゆる環境に影響を与えるた とができます。祈りに変えら愛情、とがた方の仕事とんの愛情、に なた方の仕事とものの世話にして してプロをののによりるのででよ ら、あなた方は、より人間的です。 神的な世界を築いているのです。

IV.アソシエートとしてのオプ ス・デイへの召命

固有な性格によって

18 アソシエートである皆さんは、自身の職場や家庭で繰り広げる深く個人的な使徒職を通してオプス・デイをしていきます。また、オプス・ディのメンバーたちの世話においてヌメラリたちと協力します。皆さんは、すべての力を注ぐことのできる独身者の心で使徒職を進めつつ、あ

なた方の生活を通して、洗礼を受け た者が取り組む使徒職はまったく自 由なものであることを示すことにな ります。そのため、聖ホセマリアは 皆さんに向けて仰いました。「皆さ んが羨ましい。あなた方の神への奉 献は、私と同じように全面的で完全 なものです。しかし、皆さんの活動 範囲はより広範です」[29]。これに は、どんな意味があるのでしょう か。大切なことは、世の中にいるこ とであり、諸活動の中に、什事や家 庭の中にいることです。そこにおい て、キリストの教えに従った生活を 送ることなのです。

皆さんは、実に様々な環境で暮らしており、あらゆる種類の職業に携わっています。皆さんの生活は、オプス・デイの精神を受肉させ広めるために、無限の可能性を秘めた領域へと開かれています。多様な環境からやってきた皆さんは、社会のあらゆる環境に入って行くことでしょ

う。それぞれの場所に長く留まるの で使徒職を根づかせることが容易に なります。皆さんの生き方は、住ん でいる国や町や村において、家族や 親戚、職業、近所などとの非常に多 様で安定した関わりを培うことで しょう。「皆さんはもっと届くで しょう」と、聖ホセマリアは強調し ていましたが、それは使徒職の広が りだけではなく、深まりについても 言っていたのです。それは、《世間 のまっただ中で》、分かたれない心 をもって神に奉献する生活を、あな た方は生き様によって示すからなの です。

ですから、私たちのパドレがアソシ エートはヌメラリの二倍いることを 望まれたことが良く理解できます。 なぜなら、日常における仕事、各々 の仕事こそが重要なものだからで す。

もし誰かが、オプス・デイへの召命 を考えるにあたって、ヌメラリかア ソシエートか判断しかねる時には、 ヌメラリの方がアソシエートよりも 上だと考える間違いをしないように 助言することが必要です。これは、 召命を見極める上で非常に大事なこ とです。オプス・デイへの召命を具 体化するために、はっきりしている 場合があります。例えば、既婚者は スーパーヌメラリになりますが、ア ソシエートやヌメラリにはなりませ ん。他方、あまりはっきりしない場 合もあり、最終的な識別は、当事者 本人がすべきものです。唯一共通の 召命の中で、神が具体的に望んでお られることを生きるのは当事者自身 だからです。もちろん、霊的指導の 場において、当事者を良く知り、当 事者のための神のみ旨を見極めるこ とを求めているディレクターたちに 相談することは望ましく賢明なこと です。

キリストのよき香り

19 聖ホセマリアは、アソシエートに ついて具体的に記しています。「彼 らの什事 ―それは時には共同の使徒 職を実現する場合もあるだろ― を诵 して、社会のあらゆる環境、すべて の場所、この世の実に多様な一隅に おいて、キリストの良き香りを、同 僚たちと過ごすすべての場所にもた らすだろう。そして、公的・私的を 問わず、自分たちが属する社会的身 分に伴う社会的務め、職業的・経済 的務め等をキリスト教的価値観を もって導くよう努力するだろう。そ のためには、通常、住まいも職業も 変える必要はないだろう | [30]。そ れゆえ、私はドン・ハビエルが、聖 ホセマリアの教えを取り上げなが ら、はっきりとお話になったのを直 接に聴きました。それによれば、居 場所を変えることなく、日常生活と 職業を聖化することで、アソシエー トである皆さんは、オプス・デイと

は何かを極めて明瞭に表すということです。

アソシエートの皆さんが、時々共同 の教育事業や他の使徒職活動に携わ ることもあるでしょう。しかしなが ら、それは、皆さんがオプス・デイ の使命に与る主要なやり方ではあり ません。オプス・デイ全体は皆さん の手中にあるのです。時には、それ らの役目を引き受ける必要がありま すが、しかし大切なことは、日常生 活の聖化であり、人々との親しい語 り合いの付き合いなのです。それゆ え、友人に同伴して聖ラファエルや 聖ガブリエル職の形成の手段に参加 することもあるでしょう。要する に、神は皆さんを練り粉の中のパン 種となるように招いておられるので す。繰り返しますが、皆さんにとっ て重要なことは、日常の環境の中 で、各々に固有な什事において活動 することなのです。

V.属人区の司祭について

20 ヌメラリとアソシエートの中から、オプス・デイにおける司祭の召命は生まれます。これは、オの信徒と同じく、属人区の質があるとでも、これは、大区質的を現実に本力の目ではな現実に本力の日間ではない。これがよりははないで生きることであることがあるとがより快適に歩むことがありまるに繋くことなのです」[31]。

教会における役務的司祭職 ―その中心には御聖体があります― に固有な務めに加えて、属人区の司祭は、他の信者への奉仕と使徒職活動の世話を第一の仕事とします。具体的には、属人区に固有な使命として、特に聖体の秘跡とゆるしの秘跡への奉仕、神のみことばを宣べ伝えること、霊的指導、そして教理的形成を

与えるという幅広い活動に従事しま す。

属人区の司祭がオプス・デイの精神 を生きるということは、オプス・デ イの信徒の場合と同じく、その司祭 職においてある種の特徴を持つこと になります。つまり、司祭職におい ても必然的に在俗的な精神を持って いること、信徒の負うべき責任やそ れぞれのイニシアティブを非常に細 やかな心で尊重し後押しすること、 人々を神に近づけるために超自然的 な祈りと犠牲に頼ること、心の自由 つまり愛することを人々の内に醸成 すること、司祭としてのたくさんの 什事で一杯になるように積極的に振 る舞うことなどが挙げられます。当 然ながら、可能な限り、教区の活動 にも協力をしていきます。

他者への奉仕のために

21 聖ホセマリアの数ある書簡の中 で、特に司祭である霊的子供たちに 宛てた手紙の冒頭に次のような言葉 があります。「私の息子である司祭 の皆さん、あなた方は奉仕するため に叙階の秘跡を受けました。あなた 方の使命は奉仕にあるということを 思い出すことからこの手紙を始めた いと思いました。あなた方のことを 私はよく知っています。そして、奉 什ということがあなた方の一番の関 心事であり、この一言があなた方の 人生そのものを要約していることも よく知っています。それはあなた方 の誇りであり、私にとっては慰めと なります。なぜなら、信徒であるあ なた方の兄弟そして姉妹と同じよう に、人々に善を行うことで自らを一 杯にしたいというあなた方が抱いて いる善良で誠実な望みは、私が聖パ ウロの言葉を自分のものにする権利 を与えてくれるのですから。あなた

方は『私の喜びであり、冠 (gaudium meum, et corona mea)』(フィリピ4,1)なのです」 [32]。

あなた方司祭にとって、奉仕の精神 は、あなた方が名実ともに兄弟の一 人に過ぎないことを思い出させるで しょう。オプス・デイには、「聖職 者と信徒によって構成されていると しても、ただ一つの階級しかないの です」[33]。同時に、あなた方の模 範と言葉によって、あなた方は周り の人々の内に聖性への望みを呼び覚 まし、オプス・デイにおける一致の 道具となるように努めることでしょ う。常にすべての人にとって近寄り やすい者でありながらも、その立場 に相応しい品位を保ち、立ち居振る 舞い、そして言動においても司祭と しての重厚さを保つよう努めてくだ さい。

私の息子たちよ、聖ホセマリアが皆 に向けて、「キリストについてこそ 語るべきで、自分についてではあり ません| [34]と教えられたのであれ ば、司祭であるあなた方は、特に心 して、自らを誇示したり主役になろ うとしたりするのではなく、キリス トの生涯が輝き出てキリストが主役 となるように、そして、あなた方の 姉妹たちや兄弟たちが輝くように努 めてください。そのためには、とり わけあなた方の神との一致、生活の 一致におけるあなた方の祈りと喜び に溢れた犠牲が必要です。これにつ いてはすでに良く知っているでしょ う。また、そのように生きるべく務 めていることでしょう。

VI.ヌメラリとアソシエートの 使徒的独身について

22 オプス・デイにおける男性及び女性のヌメラリとアソシエートの召命は、使徒的独身を伴います。それは

神からのたまものであり、このたま ものへの返答として、神の愛に愛で 応えることなのです。「次のことを いつもはっきり意識していてくださ い。神の愛 一愛の中の愛一、それこ そ私たちが独身であることの理由な のです」[35]。つまり使徒的独身は 単なる便宜上の一つの選択肢ではな いということなのです。より効率的 にオプス・デイの使徒職に従事し易 いから、あるいは、どこへでも身軽 に異動できるという理由で使徒的独 身をしているわけではないのです。 もちろん、独身であればこのような ことが可能であり、より容易にでき るのは事実です。しかし、使徒的独 身の根本的な特徴は、キリストの生 涯に同化するための神からの固有な たまものであるということです。 「使徒的独身は信仰の証となるべき です。神への信仰がこのような生き

です。神への信仰がこのような生き方において具現化し、神に基づいてのみ使徒的独身は意味をなすのです。 つまり結婚をせず家庭を持つこ

となく、使徒的独身に人生の基を置くことは神を受け入れ、神を現実のものとして体験することなのです。 こうして神を人々に伝えることができるのです」[36]。

使徒的独身は、私たちを他の人々から引き離すことではありません。しかし、神のために分かたれない心を約束したのですから、その生き方には自己を捧げた者としての風格が醸されることでしょう。それは既婚者が、自己の配偶者に対して持っている忠実の約束に相応しい振る舞いをすることに似ています。

徹底して召命を生きることは、時に世間との摩擦を生み出します。ここでも聖ホセマリアのより一般的ないできるではめることができるでしょう。「『自分の生き方が異教化された環境や異教そのものの雰囲気と衝突する時、私の自然さは紛い物に見えるのではないでしょうか』と尋ね

た。では、答えよう。確かに、あなたの生き方は彼らの生き方と衝突するだろう。しかし、その衝突はあなたの信仰を行いで表明した結果だから、それこそまさに、私があなたに要求する自然さである」[37]。

使徒的独身のたまものは神からの特 別の愛の表れであり、イエス・キリ ストとの特別な同化への呼びかけで あるという確信を常に新たにしま しょう。それは人間的にも勿論です が、特に超自然的にすべての人々を より深く愛する能力を与えてくれる ものです。身体的に父親、あるい は、母親になることを放棄する使徒 的独身は、より大きな霊的母性、あ るいは霊的父性を可能にしてくれま す。しかし、いずれにしても、独身 であろうと既婚であろうと、主をよ り深く愛する人がより深くキリスト との同化を生きると言えます。とい うのも結婚も「地上における神の 道| [38]なのですから。

VII. スーパーヌメラリとしての オプス・デイへの召命

神の大いなる恵み

23 オプス・デイの信者の大部分は スーパーヌメラリです。皆さんは生 活のすべてを聖化するよう努めてい ます。特に、結婚生活と家族生活を 聖化します。というのも、通常は既 婚者であることが多いからです。 1947年、聖ホセマリアは、受け取っ たスーパーヌメラリに関する考察に 対して、スペインの息子たちに以下 のように答えています。「スーパー ヌメラリたち(について)のメモを 読みました。来週そのメモをいくつ かの具体的な指示とともに返しま す。ともかく、前もって言います が、私たちは、何人かの紳士がある 特定の組織に申し込むことを扱って いるのではないという視点を忘れる ことはできません。スーパーヌメラ

リになるとは、大きな神の恵みなのです!」[39]。聖ホセマリアは、恵みを与えるのは神ご自身であり、

「あふれる恵みである」と記しています。オプス・デイへの召命は、神の大いなる恵みなのです。スーパーの大いなる恵みなのです。スーパーな聖化の道を歩むための特別な助けをもたらします。それは洗礼によってしるされた道であり、多くの場合は、婚姻の秘跡を受けて家庭を築くという道です。

ただ中で個人的聖性を獲得するために、自己の置かれたまさにその場所で、教理に裏打ちされた堅固なとれた堅固なとれた堅固なとえて、をも、各瞬間の表務を喜んで果たがある」[40]。したである」[40]。はあるでも、とを目指している。です。をと決して見ないであるでしょう。はあるでであるでしまり、神のはあるです。

皆さんの使命が持つ展望は、「人々を神化するパン種となること。人々を神のものにすると同時に、真にとで間味あふれるものとする」[41]こをでいたで聖パウロをはいるものとする」[41]こをでいたで聖パウロをでいたでいたでいたででででいた。またででいた。またでではじめ多くの人々に福音をはいいた。とのようになることをできること。大勢ののはもりないではないではいる。とのはいるとのようになること。とのはいるとのようになること。といるとのはいるとのではいるというではなること。といるというではなること。といるというではいるというではいるというではいる。

ら、同時に闇に覆われた世界において、地の塩、世の光となることです。

「スーパーヌメラリの中には、社会 のあらゆる階層、職業、役職の人々 がいます。生活のあらゆる環境も状 況も、これら私の子どもである男女 によって聖化されるのです。彼ら は、世間における各々の身分や状況 に応じて、召命を十全に生き、キリ スト者としての完成を追求するので す」[42]。私たちのパドレが、「召 命を十全に | と強調されていること に注目してください。その上で多様 性について述べておられることか ら、オプス・デイが日常生活におけ る聖性と使徒職の道であることを事 実として明確にされているのです。 人間の品位ある多様性のすべては日 常生活にあるのですから。

結婚と家庭

24 オプス・デイにおけるスーパーヌ メラリの召命は、まず家庭の中で培 われます。「あなた方の第一の使徒 職は家庭にあります」[43]。聖ホセ マリアは、スーパーヌメラリたちの 家庭が「明るく喜びに溢れ、福音の メッセージを放つ中心 | [44]になる ことを夢見ていました。それは皆さ んが社会に残す遺産となります。だ から、聖ホセマリアはあなた方に次 のように書き送りました。「オプ ス・デイの形成を受けることによっ て、家庭の美しさと家庭を築くとい う超自然の仕事の価値に気付き、ま た、夫婦の務めに隠されている聖化 の泉に気付くことでしょう」[45]。

さらに、他の家族に積極的に影響を与えるように招かれています。特に、人々の家族生活がキリスト教的な意味を持つように助け、多くの若者が夢を持って結婚を準備し、新た

なキリスト教的な家庭を築く下地を 整え、さらに神の望みに応える使徒 的独身への召命がたくさん生まれる ように手助けするのです。

独身者や未亡人、子どもの授からない夫婦の皆さんも、家庭を第一の使徒職として見ることでしょう。なぜなら、それぞれの生活は、常に心を配るべき家庭であるからです。

置かれた場所で周囲にキリスト 教的な影響を与える

25 聖ホセマリアは皆さんの中にキリスト信者の偉大な働きを見ていました。それは、皆さんが、特に友情と信頼の使徒職を通して、仕事とるるにキリストの愛を輝かせることでした。そうすることで、社会をより人間的で神のおります。社会をより人間的で神のおります。社会をより人間的で神の時代の諸問題の解決に積極的に関わる

ことでしょう。「各自の仕事や活動の領域で、職業や制度、諸活動をキリスト教的な精神で導くなら、あなた方は非常に実り多い使徒職をします」[46]。

スーパーヌメラリの召命とそれに伴 う使命は、いくつかの信心を果たし たり、形成の手段に参加したり、何 かしらの使徒的な活動に協力するこ とだけに限定されません。それどこ ろか、あなた方の人生のすべてを包 んでいます。なぜなら、生活のすべ てが神と出会う機会であり、使徒職 だからです。オプス・デイをすると は、各自の生活においてオプス・デ イをすることであり、また、聖徒の 交わりによって世界中の人々と協力 し合ってオプス・デイを実現させる ことなのです。それは、創立者が分 かりやすい言葉で教えてくださった ように、《一人ひとりがオプス・デ イになる》ことによってオプス・デ イをするということです。

オプス・デイを自分のものとして感 じるなら、自分自身の形成に強い関 心を持つようになります。それは、 キリストを他の人々の所へ連れて行 くためであり、信仰の根拠を明らか にするためです。実際、「オプス・ デイが与える形成は柔軟性がありま す。それは各自の個人的、社会的な 状況に手袋のごとくピッタリ適応し ます。(…)私たちの精神は一つ、 修徳の手段も一つですが、硬直化す ることなく、どのような状況におい ても実現できるし、実現されるべき なのです| [47]、

硬直化を避ける柔軟性は、スーパー ヌメラリへの要求を緩めることでは ありません。イエス・キリストとに英 雄的に、心の底から付き従うこと状 変わりはありません。従って、状きの 相違にあまり気を取られる状況で はなく、むしろ、そのような状 神の招きであり、神によって与え れた使命であるという本質的な 目を向けるべきです。どんな状況でもやるべきことは、イエス・キリストと一緒にいて、イエス・キリストを愛し、イエス・キリストと共に働き、イエス・キリストをあらゆる場所にもたらすことです。

「スーパーヌメラリは、オプス・デ イへの奉仕に部分的にたずさわりま す| [48]と、聖ホセマリアが書いの は、具体的な使徒職活動に関する物 的な従事可能性を指したのであっ て、オプス・デイを部分的にすると いう意味ではありません。この務め は、もう一度強調しますが、生活の すべてを通して実現されるものだか らです。それゆえ、私たちのパドレ は、スーパーヌメラリが使徒職にお いて果す使命について、次のように も書いています。「実践すべき使徒 職とは、散発的または時折なされる 活動ではありません。召命によって 常日頃から、全生涯の理想としてな されるものです | [49]。

神は、皆さんが自発的に率先して、扇のように心を開き、福音のますに心を開き、福音のする種類の人々にもたらすこ方を望んでおられます。「あないたちの情が示す非常に広い範囲の中で、各野に立った場所で、それぞれの分野にした場所で、それぞれの大りにした活動を見出すために「50」。

これは私の娘たちと息子たちであるスーパーヌメラリの大いなる使命です。それには限界などありません。「スーパーヌメラリがオプス・デイの精神で照らし出さない村が一つでもあってはならないのです | [51]。

VIII.聖十字架司祭会のアソシ エート、スーパーヌメラリとし てのオプス・デイへの召命

26 「あなた方は私とまったく同じようにオプス・デイの者です」と聖ホセマリアは、属人区に入籍していない聖十字架司祭会のアソシエートとスーパーヌメラリである司祭と助祭たちに語っていました。

当然のことながら、世間の中での聖性への呼びかけには、教区に入籍する在俗司祭も含まれています。 とれてディへの召命は同じです。 というのも、オプス・ディの家族の手段にずれるり、同じ精神と修徳の手段によって聖性を追求し、置かれた環境や各自の義務の遂行において使徒職を実践するよう神に呼ばれているのですから。

確かに、属人区の信者と、属人区に 入籍していない聖十字架司祭会の会 員が、オプス・デイと持つ関係の法 的表現は異なります。しかしなが ら、(一方は属人区の権限の下に、 他方は会組織的な)法的絆の多様性 は、オプス・デイの同じ精神と固有 な手段によって聖性を求めるという 召命の同一性を何ら損なうものでは ありません。

この法的性格の違いは、オプス・デ イへの召命があなた方をそれぞれの 場から取り去らないことを示してい ます。というのも、皆さんはそれぞ れの教区に入籍し続けており、それ ぞれの司教や他の司祭方との関係に は、いささかの変化もないのですか ら。あなた方の召命は強化され、適 切な手段によって自己の聖性の道を 愛すべきものとなし、司祭としての 約束や奉什者としての務めを忠実か つ寛大に果たすことが容易となるこ とでしょう。その上、皆さんには、 司祭召命を促進させるという特別の 責任があります。皆さんは、それぞ れの教区の司祭団の中にあって、司教との一致のパン種、兄弟愛のパン 種となるよう招かれているのです。

私たちのパドレは、この点をどれほど励ましていたことうにしょう。「目的にも寄り添うようにしい。肉の心を持ってください。肉の心とは、私たちがイエス、御父。もる心のことが困窮しているのだれかが困窮しているのがれられるのを待たない」「52」。

次の点を考えると嬉しく思います。 それは、霊的生活の《基軸》は職業 ですが、聖十字架司祭会の会員に とっての仕事の聖化とは、基本的に 司祭としての活動の聖化を意味する ということです。その仕事の主な事 柄は客観的に神聖な活動です。しか し、同時に、すべての仕事と同じよ うに、自己の聖化と使徒職の場であ り手段でもあるのです。

27 神が聖ホセマリアにオプス・デイをお見せになった1928年10月2日の100周年に私たちは迫っています。あの時以来、世界と教会は、またオプス・デイも、多くの喜びと苦しみを経験し、今も続いています。

1975年3月27日、私たちのパドレは 説教の中で祈りながら、比較られるがら、比較られるがら、比較られるでディの歴史を振りのを振りのです。 で大な展望、していてないでは、 で大なでであるででででであるででででででである。 ではで打っていたものです。 が、これででするからです。 が、これででするがとのです。 が、これででするがとのです。 が、これででするがとのです。 が、これででするがとのです。 が、これででするがとのです。 が、これでではいただでです。 はていただくのキリスト)にしていただくの です。主よ、すべてに感謝いたしま す。心から感謝いたします」^[53]。

キリスト教の召命の美しさを、主は オプス・デイという形で私たちこと りに具体化してくださったことを思うと、喜びに満たされます良までは、多くの善良な人々喜びに満たされまでは、多では、私たちのが、「十字架の形をした根」を持たされた超自然的な喜びで特に満たされることでしょう。

あらためて考えましょう。「聖十字 架は私たちを永続的なものにしてく ださり、常に福音の同じ精神をもっ て、祈りと犠牲の美味な果実として 行動の使徒職をもたらしてくださ る」 [54] ということを知れば、私たち は喜びに満たされます。

至聖なる処女マリアが、母として私 たちを祝福してくださり、私たち皆 が、自分の手の中にオプス・デイを 持っていることを思い出させてくださるように願いましょう。この思いましょう。に、神の御心に従い、神の恩恵に従い、神の恩を見るといるながら、1928年10月2日に始ちにといるながら、私たちの弱さと過ちにもの終わらず、時の終わりまで続けましょう。とをもって働きにあることをもって働きがある。

愛情を込めて、皆さんを祝福します あなた方のパドレ

フェルナンド

ローマ、2020年10月28日

[1] 手紙、1932年1月9日、n. 9。

[2] 手紙、1952年12月12日、n. 35。

- [3] 手紙、1954年5月31日、n. 17。
- [4] 手紙、1967年3月19日、n. 93。
- [5] 『神の朋友』、146。
- [6] 聖トマス・アクィナス、『ローマ人への書簡の注解』、cap. 8, lec. 3。
- [7] フランシスコ、回勅『兄弟の皆 さん』、277。
- [8] 第二バチカン公会議、『教会憲章』、3。
- [9] 『鍛』、69。
- [10] 『鍛』、835。
- [11] フランシスコ、使徒的勧告『福音の喜び』、121。
- [12] Conversaciones, n. 19.
- [13] 手紙、1954年5月31日、n. 34。

- [14] 『知識の香』、74。
- [15] 『鍛』、156。
- [16] 手紙、1951年12月24日、n. 137。
- [17] 手紙、1961年1月25日、n. 11。
- [18] 福者アルバロ、『聖ミカエル職についての指針(Instrucción sobre la obra de San Miguel)』、脚注135。
- [19] 属人区長のメッセージ、2020年 7月20日参照。
- [20] 手紙、1957年9月29日、n. 8。
- [21] 同、n. 76。
- [22] ハビエル・エチェバリーア、司 牧書簡、1995年11月28日、n. 16。

- [23] 『聖ガブリエル職のための指針 (Instrucción para la obra de San Gabriel)』、n. 113
- [24] 『オプス・デイの超自然的精神についての指針(Instrucción sobre el espíritu sobrenatural de la Obra)』、n. 28.
- [25] 説教、1963年4月28日。
- [26] 聖ヨハネ・パウロ2世、使徒的書簡『女性の尊厳と使命』、30。
- [27] Conversaciones, n. 88.
- [28] 手紙、1965年7月29日、n. 11。
- [29] 団欒、1962年9月15日。
- [30] 手紙、1957年9月29日、n. 13。
- [31] 手紙、1956年8月8日、n. 7。
- [32] 同、n.1。

- [33] 手紙、1956年8月8日、n.5。
- [34] 『知識の香』、163。
- [35] 『聖ミカエル職のための指針 (Instrucción para la obra de San Miguel) 』、n. 84.
- [36] ベネディクト16世、演説、2006 年12月22日。
- [37] 『道』、380。
- [38] Conversaciones, n. 92.
- [39] オプス・デイの中央委員会(男子)への手紙、1947年12月18日。
- [40] 『聖ガブリエル職のための指針 (Instrucción para la obra de San Gabriel) 』、n. 9。
- [41] 手紙、1959年1月9日、n. 7。
- [42] 手紙、1959年1月9日、n. 10。

- [43] 手紙、1959年1月9日、n. 53。
- [44] 『知識の香』、30。
- [45] 手紙、1959年1月9日、n. 53。
- [46] 手紙、1959年1月9日、n. 17。
- [47] 手紙、1959年1月9日、n. 33。
- [48] 『聖ガブリエル職のための指針 (Instrucción para la obra de San Gabriel) 』、n. 23.
- [49] 『聖ガブリエル職のための指針 (Instrucción para la obra de San Gabriel)』、n. 15.
- [50] 手紙、1942年10月24日、n. 46。
- [51] 手紙、1959年1月9日、n. 13。
- [52] 司祭たちとの家族的集いでのメ モ、1972年10月26日。AGP(属人区

総合文書館)、sección P04 1972, II, p. 767.

[53] 説教での言葉。AGP(属人区総合文書館)、sección P01 1975, p.809.

[54] 『オプス・デイの超自然的精神についての指針(Instrucción sobre el espíritu sobrenatural de la Obra)』、n. 28.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkucho-tegami-2020-11/(2025/11/20)